千本木川

土田耕平

青空文庫

裏の山から出て、私の村の中ほどをよこぎつて、湖水へ流れこむ川を、千本木川といひました。千本木川――どうして、そんな名まへがついたのでせう。私の幼いころの記憶では、川ぶちに目立つほどの木もなかつたと思ひましたが――

この千本木川の岸に沿つて、ほそい一すぢ道が湖水の岸までつづいてゐました。私はその道づたひに、歩いて行くのが好きでした。

川は葭の茂つた中にかくれてゐて、水の音ばかりが、どう〳〵ときこえました。幅一間ばかりの小川でしたが、瀬の早い荒川でした。湖水岸へ出る二町ばかり手前に、葭のきれめから水の流がのぞかれるところがあつて、そこは、早瀬が岩にせかれて、淵になつてゐました。

ある夏のあつい日のこと、私は、いつものとほり、川づたひのみちを、行きました。青くすんだ淵のいろを見ましたら、何だか水にひたつてみたくなつて、葭のあひだを分けて、下りて行きました。岩の上へ着物をぬいでおいて、水の中へ、一足ふみこみますと、水晶のやうなつめたい水が、ぞつとしみて、からだぢゆうの毛穴がひきしまるやうに、おもはれました。私は、こは〳〵〳〵二足三足とふみこんで、丁度乳のあたりまで水がとどいたとき、淵のまん中に立ちました。あたりを見まはすと、高く葭が取りかこんで、頭の上に、ぢり〳〵焼きつけるやうな、お日さまがくるめいてゐました。

私は、ほんの二三分の間、淵の中に立つてゐたのでせうが、それはとても長い時間のやうに

思はれました。きふに、逃げるやうにして、川岸へあがつてしまひました。

それから、私は毎日、淵へ行つては、ひたりました。はじめの恐さから、だん〳〵なれて、じぶんの一人あそびをたのしむやうになりました。

さうしていく日かたちました。ある日、はげしい雷雨のあつたつぎの日のこと、川づたひに行つてみますと、途中、葭の中からきこえる水の音が、恐ろしく地ひびきしてゐました。いつものところへ行つて、淵をのぞいて見ましたら——どうでせう、あの清らかにすんだ淵は、あとかたもなく、赤にごりした水が、大きな岩にかみつくやうにしてぶつかつてゐました。私はとても水に入る気にはなれず、ぼんやり立つたまゝ見てゐました。

それから、二日三日とたつうちに、水のかさも減り、赤にごりした色も落ちつきました。前よりも一そうすんで、きよらかな水になりました。

秋になつたのです。川岸の葭が穂に出て、涼しい風が、そよそよとしてゐました。もう水あそびする気にはなりませんでした。

青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系　第九巻」ほるぷ出版
　　1977（昭和52）年11月20日初刷発行
底本の親本：「夕焼」古今書院
　　1932（昭和7）年5月
入力：菅野朋子
校正：noriko saito
2011年7月14日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

千本木川

土田耕平

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/